様式B（マニュアル様式）

政務活動報告書

令和元年10月11日

〔会派名：　自由クラブ　〕

代表者氏名	山下　登　印	記録者氏名	山下　登　印
活動者氏名	山下　登・柏　元三		
活動日	令和元年10月8日（火）～10日(木)		
活動先	1.秋田県東成瀬村(東成瀬小学校/東成瀬中学校) 2.岩手県遠野市(遠野食育センター/遠野市役所防災課)		
活動目的	1.秋田県東成瀬村がなぜ学力日本一を誇るのか 2.東日本大震災時にボランティア活動のバックヤードとして役割を担った自治体		

1.概況(平成29年度決算資料)

	東成瀬村	遠野市	名張市
人口　(人)	2,610	28,062	78,795
総面積（㎢	203.69	825.97	129.77
地方税　(千円)	190,866	2,769,986	10,224,473
地方交付税（千円)	1,862,851	7,743,477	4,323,627
将来負担比率　(%)	4.0	76.3	185.9
計上収支比率　(%)	97.3	88.0	99.7
地方債残高（千円)	5,592,111	20.001,224	34,687,732

2.特別職(平成29年度決算資料)

	東成瀬村	遠野市	名張市
市村長　(千円)	730	789	900
副市村長（千円)	560	654	690
教育長（千円)	513	568	578
議員（千円)	211	302	437
議員定数（人)	10	18	18

3.学校(ウィキペディアより)

	東成瀬村	遠野市	名張市
小学校数	1	11	14
中学校数	1	3	5
高等学校数	0	2	2

4.秋田県東成瀬村(東成瀬小学校/東成瀬中学校)

① 39%が高齢者でスーパーもなくコンビニが1軒という自治体で、近年国内はもちろんのこと韓国やモンゴルなどの他国からも、子ども達の学力を伸ばす実績から訪問

名張市議会 受 01.10.15 第 号

(視察)が絶えない自治体。

② ２０１７年の文科省による「全国学力テスト」で秋田県は８年連続１位、なかでも東成瀬村はトップクラスの学力を誇る。

③ 学習塾は１軒もない。

④ 小学校の全校児童数100人、各学年１クラス、教職員数16人、保護者の９割は共働きで約７割が３世代同居。

⑤ 小学校の廊下はキレイに書かれた掲示物でいっぱい。

⑥ 図書室も文学からマンガ、スポーツなど児童が興味をもつ書物は多数(週１回司書が点検整理)。

・今回の視察で学校、地域、家庭のちからが学力の高さを維持していると感じました。
それは教育行政に村だからできる教育、創意工夫の教育(不易と流行)としてしっかりと示され、学力向上の基本方針には魔法の杖はない、工夫と改善とある。当たり前に出来る子どもの教育は多様な価値観を育み、温かい人間関係を醸成し伸び伸びとした教育環境により教育に対する安心感や信頼感が生まれています。
いま全国で学校の統廃合が叫ばれています。
本市の小中一貫というワードはいったい誰のためと考えさせられました。
子どもたちの学び、自立、豊かな人間性などは学校、地域、家庭が一体となり守り育てるのをよしと考えますが、ただ財政面から学校をなくす、教員を減らすという現実がありますが、視察先の小中連携というワードは本市においても十分検討する余地があると思います。
東成瀬における学力向上の具体策は a.授業の改善で子どもの積極性を考え b.研修の充実として小中連携授業研究会などを実施 c.基本の定着として繰り返し基礎を重ね d.家庭学習の充実(自主学習)があげられます。
これまで以上に厳しいと予測される社会を生き抜く力は、読書や新聞購読などからの読解力、学校での学びの空間で他人から学ぶという力、地域のボランティア活動などを通して郷土愛を学ぶ環境などで育んでいることを実感しました。
現地訪問で"さすが教育県"と痛感、教員の指導力、小学校、中学校の全教員が連携し研究授業をかさね、子どもの学ぶ意欲を引き出すため、心をゆさぶる授業が出来たかどうかを多くの教員が関わり議論し質の高い探究型授業を構築している。
しっかりとした方針、システムで子どもを大切にしているなかで、とりわけ学習ノートには感心した・優れた学習ノートは校内で紹介され、友達のまとめ方の良さなどを見習い参考にしていた。なにもかもがシャワーのように子供たちに注がれ学力の高さを支えていることと感じました。

5,参考(平成29年度の歳出額と構成比)

	東成瀬村	遠野市	名張市
教育費(千円)	263,949	1,930,102	1,832,000
構成比(%)	7.1	9.6	6.8
民生費(千円)	534,752	4,856,952	11,013,230
構成比(%)	14.1	24.1	41.1

6.岩手県遠野市(遠野食育センター/遠野市役所防災課)

(1)遠野食育センター

①食育の推進による健康で豊かな暮らしの創出、安全安心な地域資源の活用による活気あふれるまちづくり、心と体の健康づくりと夢を育むおいしい給食を基本理念とし平成25年供用が開始された。

②平成30年度現在稼働日数220日、供用延食数8,190食の実績

③食育の概要

a.乳幼児期・・食習慣の基礎づくり

朝食の大切さ、おやつの食べ方、生活リズム、噛むことの大切さ、家族で楽しく食べることの大切さなどに関する知識を伝達

b.学童期・・望ましい食習慣の定着

心身の発達が著しいこの時期に正しい生活のリズムを見につけ、食への関心を深める支援。

c.思春期・・自立に向けた食生活の基礎づくり

進学や就職などで親元を離れても自立した生活ができ、生涯を通した健康づくりにつながる支援

d.青年期・・健康的な食生活の実践、維持

結婚、出産、子育ての時期。自らの健康だけでなく家族の健康管理も担う年代であり、健康な生活を送るための支援

e.壮年期・・生活習慣病を予防する食生活の維持と健康管理

職場や家庭で忠心となって活躍するため、ストレスも多く自分の健康管理がおろそかになり生活習慣病にかかりやすい年代であり予防する食生活を実践する支援

f.高齢期・・食を通した豊かな生活の実践

長年の生活習慣によるものや加齢に伴う身体機能の低下も重なり、健康への不安も感じてくる時期であり、低栄養など要介護リスクの予防を実践

④全体を通して

行政はa.食育まつりや健康づくり講演会を実施b.食育アドバイザーの養成及び組織育成を実施、学校ではa.脳卒中予防啓発ビデオの作成や学園祭で特設コーナー展示など高校生による脱脳卒中の運動や、地域ではa.食育標語ポスターを作製し食育推進の啓発b.地域の行事、郷土料理をまとめた「食暦」など作成するなど、食は命の源であり、健康で豊かな生活に欠かせないものとして取組まれていた。

センターは「市民の健康を食で支える」をキーワードとし、災害時の炊き出しも想定。日常は学校給食にくわえ高齢者の地域における自立した生活を継続させるため、調理が困難な高齢者や栄養状態の改善が必要な高齢者に対して定期的な訪問による栄養バランスのとれた食事の提供とともに利用者の安否確認をも行っていた。

本市も高齢化がすすみ一人住まい、孤独死(孤立死)の課題もあり食育センターなるものの多岐にわたる活用をイメージした。

(2)遠野市役所防災課

①3.11 東日本大震災において取組まれた後方支援活動についての先進地として訪問、災害支援についての知見を伺った。

②東日本大震災で官民一体となって沿岸部の津波被災地の後方支援活動の様子は、後方支援の教訓として資料館を市総合防災センター横にオープンし後世に伝える役も果たす。

③大震災当時、遠野市も震度5強の揺れで市役所本庁舎中央館が全壊するなどインフラは甚大な被害を被り市内の避難所50カ所に避難者多数に上ったと同時に、後方支援活動は動き出していた。地震発生の14分後に救援部隊の集結拠点となる運動公園を開放受け入れ準備を開始したとあった。

④夕刻には県警機動隊、陸上自衛隊、大阪府緊急消防救援隊など全国から終結する救援隊を受け入れとあわせて、市内各所では市民と職員か炊き出しを開始。

⑤その後は沿岸自治体への物資の仕分け、運搬からボランティアの受け入れなど考えつく限りのあらゆる支援活動を展開した。

⑥バックヤードとして大きな役割を果たせたのも指揮をとった市長の存在は大きい。
なぜなら、本田敏秋市長は元県庁職員で阪神・淡路大震災が起きた95年4月には県の消防防災課長の職にあった。

⑦当時、知事から地域防災計画の見直しと防災ヘリの導入を命じられた経験があった。

⑧過去の災害の歴史を紐解き、沿岸部をくまなく回り、ヘリにのり上空から地形や距離、避難路などを分析し、それぞれの地域防災計画の全体像があった。

⑨大災害の時代
いま私たちはいつ起こるか分からない災害への備えの必要性が問われています。
本市は165号線、368号線の道路しかありません。また鉄道の使用は未知数です。
せまい地域に多数の住宅地を構成している市です。バックヤードとしての役割より陸の孤島、閉鎖された地域に住む以上は覚悟をもって備えなければなりません。
災害に強いと声高に情報がありますが、逃げ場のない地域ということを忘れてはなりません。
それぞれの住宅地の避難路の確保、食事の調達、休憩所の確保、人材やボランティアの役割や職員の勤務体制など多岐にわたります。
伊勢湾、大阪湾など東西のバックヤードとしての役割より狭い地域にある逃げ場のない地域に生きる市民の安全確保について考えさせられました。
災害時には鉄道使用不可、避難路は狭く逃げ場がない。あらゆる災害を想定した訓練の必要性をも感じました。
遠野市では大型ヘリコプター10機、中小型ヘリコプターでは30機の離発着が可能。
また道路は国道4本、高速道路1本など予想される災害に対し速やかに対応すべく近隣市町村で推進協議会を立ち上げているなど心強さをかんじました。

視察報告書

令和元年10月28日
名張市議会
自由クラブ

視察先：東成瀬村教育委員会　東成瀬小学校　東成瀬中学校
　　遠野市食育センター　遠野市防災センター
視察日：令和元年10月８から１０日

視察日程（活動日程は別紙事務局作成）
１、東成瀬村学校訪問は別紙参照
２、遠野食育センター
　10月10日10時から10時３０分
３、10月10日13時３０分から15時２０分

名張市議会
'0 1.10.28
第　号

視察報告
１、東成瀬村学校視察は別紙参照
２、遠野市食育センター（添付資料参照）
①　一番の驚きは総事業費１３億円の中、市単独費が約１億円であったこと。学校給食に限定せずに「市全体の食育推進」と位置づけ、高齢者配食をセットにして「社会資本整備総合交付金」４億円と「過疎債（国が交付税措置）」８億円を活用した。
　金がないからPFI手法と短絡せず、「施設整備及び運営を市が行う」ために何が必要かを検討した。
②　食育センター整備市民懇談会を立ち上げ、市民の意見を吸い上げた。
③　学校給食は指定管理方式で民間業者が運営している。
④　一般市民配食センターはボランティア組織が運営している
３、遠野市防災センター（添付資料参照）
遠野市は東日本震災の時、被災地後方支援で重要な役割を果たした。近いうちの発生が懸念されている東南海、南海地震が発生した場合、名張市はどのような役割を果たすべきかを考え準備しなければならないはず。
「名張市はバックヤードにならなければ」との声もあるが、果たしてバックヤードとして役に立てるだろうか？その疑問を解く鍵が、既に実績のある遠野市にあると考え訪問した。
約束の時間より早く到着したので東日本震災の記録を集めた「後方支援資料館」を見学した。当時の状況が丁寧に記録されており「後方支援いかにあるべきか」の予備知識を得た上で、消防署担当者の説明を聞いた。
①　三陸海岸地帯は明治と昭和の三陸大津波、チリ地震津波と三度も大津波に遭遇し、遠野市はその度に支援活動を行った実績があり、市民も後方支援に慣れていた。
②　後方支援活動を視野に入れて陸上競技場や野球場など各種運動施設を近隣に配置し、支援拠点の機能を整備してあった。
③　後方支援活動は大変な任務で、名張市には担える実力が無いと思えた。
④　名張市は後方支援拠点の「サポート役」がふさわしいと思えた。

秋田県東成瀬村学校視察

学校教育の理想像を全て実現している東成瀬村の教育

昭和３０年代、全国40位代に低迷していた秋田県は教育予算を手厚くし、先進的教育を目標に掲げ、今では全国トップの教育県となっている。

全国学力学習状況調査で常にトップ３の秋田県の中でも、No１と知事自慢の学校が東成瀬小中学校です。

その教育現場の景色と空気に触れただけで、私の知識では想像もつかない「鳥肌が立つほど驚異的」な教育に、心が震えた。日本中の教育に係る学者や評論家の理想論が全て実現して｛いじめが発生しない」「不登校にもなりようがない」「学校が好きになる」日本一の小中学校を目の当たりにした。

全国学力学習状況調査の上位をめざして、過去問題や予想問題の集中勉強に取り組む、英数国理社など「見える学力」重視の学校が多い中で「見えない学力」に注力した教育によって「見えない学力」が自然に身に付く、本当に理想的な教育が成されて、東成瀬小中の指導には「教え込む教育」が微塵も見当たらない。

都合７時間の視察でしたが、その程度ではとても学びきれない広く深い学校経営が実施されており、私の報告は表面的な氷山の一角にすぎない。

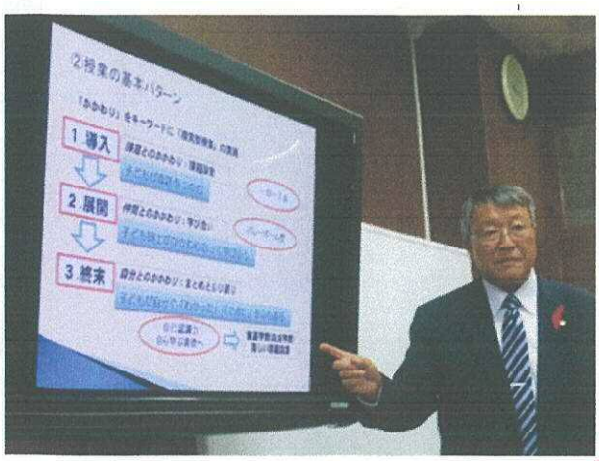
東成瀬小中学校「学力向上への取り組み」

東成瀬教育を育て上げた立役者・鶴飼教育長（写真）

数多くの教育関係書を読み、教育研究者や学者の講演を聴いたが、鶴飼教育長のお話は、学校現場での実践の裏付けられており、その教育理論は他の教育関係の学者や識者が足元にも及ばないと思える説得力があった。

このような教育は突然作られるものではありません。教育に携わる人ならば、誰でも共鳴出来るような目標を示し、わかりやすく説明・説得できる「この教育長あっての東成瀬教育」を実感した。鶴飼教育長が常に入れ替わる先生方を指導しながら、十数年の苦労で作り上げた学校に思えたが、苦労もさることながら「子どもたちと楽しく夢を追つているうちに」子どもたちへの思いがここに至らせたのだろう。また、秋田県と東成瀬村の教育政策の後押しが大きな追い風になるなど、人物がおり、その人物を活かす環境との善循環が生み出した学校教育の最高傑作であるが、「東成瀬でできたことだから」と同じことは出来ない。名張市はせめてその百分の一からでもスタートすべきだ。

東成瀬には「コミュニティスクール」「小中一貫教育」の文言を聞かない。文科省が唱える以前から既に出来あがっていたのだ。



「授業の基本パターン」の説明をする鶴飼教育長

「授業の基本パターン」

１、導入　課題とのかかわり・課題設定

↓ 子どもが課題をつかむ

２、展開　仲間とのかかわり・学び合い

↓ 子ども同士がかかわり合って学ぶ

３、終末　自分とのかかわり・まとめとふり返る

子どもが自分で「わかった」「できた」をふりかえる

自分認識力
自ら学ぶ意欲へ

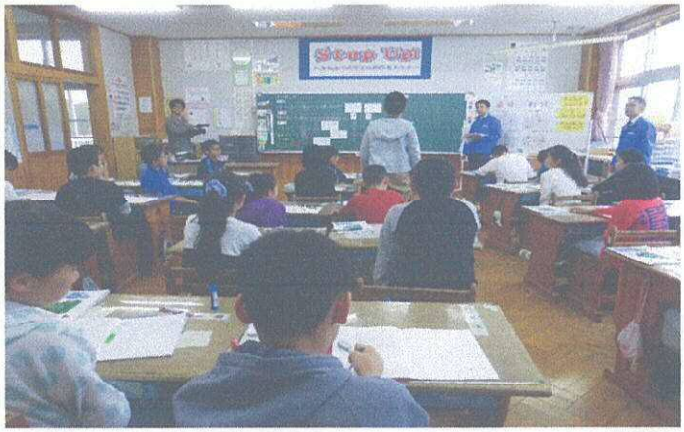
→ 家庭学習（自主学習）
新しい課題意識

分かった子も分からない子もみんな手をあげる

「分からない」「困った」ときも手をあげられるハンドサインは授業を活気溢れさせ、どんな時も子どもが積極的に授業に参加でき、自己有用感を育てる。

チームティーチング

教室にに3人の先生が配置され、分からない子に分かるまで教え、積み残しをしない授業、
子どもの発言は再度子どもに返され、子どもどうしで話し合われる。



グループでの「学び合い」

アクティブラーニングを遙かに超えた学習法がなされている。
要は先生のコーディネート力の養成に注力していること

1、仕掛ける
2、揺さぶる
3、広げる
4、つなげる
5、引き出す

将来の夢ー大きくなったら

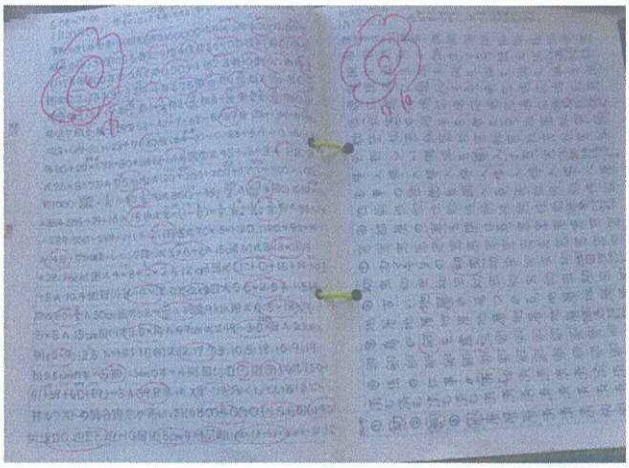
玄関に張られている全校生徒の夢
成長し勉強が進むと目標も変化するので半年に一度書き換えられる
将来のビジョンを考えながら、日々学べるようにという先生方の願いも込められている。

「自学」するのは勉強が楽しいから

宿題が無い。放課後の家庭学習は自分の好きな勉強をする「自学」だ。
優秀な自学ノートが展示され、子どもたちは参考にし、保護者も見て子どもに教える。
先輩のノートを参考にして学習テーマを高めることも通常である。
黄色の表示板には「自学のレベルアップ」「今年も中身の濃い自学に」と記載。

「ぐるぐるノート」　4人グループで家庭学習

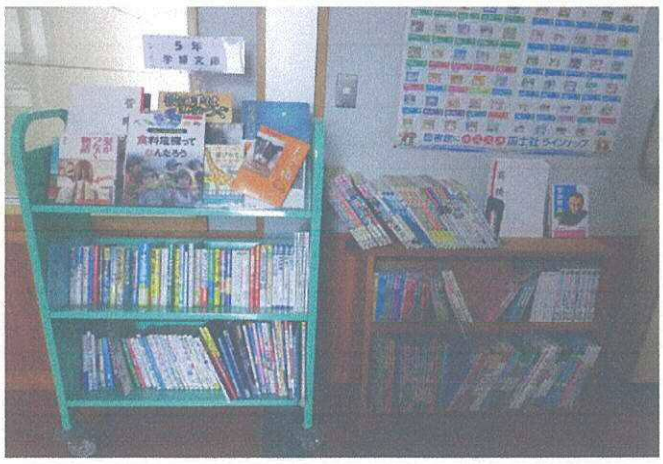
交換日記のように友達同士でまわしながら学び合う（写真の赤いノート）



本で総合的な力を伸ばす

校内いたるところに
本・本・本

児童一人当たりの図書費は年間６０００円
（名張市の６倍以上）
校内には立派な図書室があるが、各学年の教室の廊下や会談の踊り場に、担任の先生が選んだ本が並んでいる。



ついていけない子を積み残さず
出来る子には上の課題を与える

先輩が教える「自学ノートのレベルアップ作戦」が階段の壁に貼られていた。
中１から小６へ、小６から小５へ・・・・・・
小２から小１まで

小学校と中学校が児童生徒・教師共に共通の概念で運営されており、自然な形で一体感が形成されていた。学校の廊下も階段もいろいろな掲示物で埋め尽くされており、報告はその一部にすぎない。後日、教育現場に参考になるような報告書を作成したい。